

留学生指導をめぐる

留学生センター 小林基起

(一) 留学生センター留学生指導部門

鹿児島大学留学生センター内には日本語・日本事情部門、日本語研修部門のほかに、留学生指導部門が置かれている。留学生指導部門の役割は、留学生の修学や生活の困難性の軽減と問題の解決にあると認識している。留学生の所属部局や指導教官及び日本人学生との関係が言語を含めて円滑に進む手助けをする役割も含まれている。また、もう一つの役割として日本人留学生の海外留学への援助・拡大という仕事も与えられている。昨年11月に留学生センターは、センター長および専任教員4名の5名体制となり、センター内には相談窓口が置かれ、既にさまざまな相談を受けている。短い期間ではあったが多くの解決すべき問題の所在に気づいた。そのどれもが容易に解決できるものではないが、いくつかの基本的な問題について取り上げてみたい。

(二) 私費留学生について

留学生十万人計画の方針のもと、昨年度は5万6千人（2000年度は6万人を超えた）を数えるようになったが、その内訳は国費留学生1に対して私費留学生はほぼ9の割合（註1）であり、圧倒的多数が私費留学生となっている。鹿児島大学の場合、私費留学生の割合はそれほど多くは無い（現在私費は56%）が、増える傾向にある。国費留学生の奨学金は毎月学部生が14万2千5百円、院生が18万5千5百円（学費・入学料はすべて免除）であり、ほかにも手厚い援助があるのに比して、私費留学生の現状には悲惨なものがある。私費留学生は多くがアジア諸国（中国104名、韓国8名、インドネシア7名等）から来ており、日本との所得格差は十倍以上もあり、韓国など特別の場合を除いて本国からの送金や貯金は焼け石に水であるのは周知のことである。鹿大入学のために通った日本語学校等への学費に所持金は消え、借金をしているものも少なくはない。このような私費留学生にとっては奨学金と授業料免除（全額と半額とがある）の獲得は修学成就のための死活問題となっている。しかし現状では鹿大274名の留学生のうち90名は奨学金を受けられない状態に置かれている。試みに本学一年Y君の実例を挙げてみたい。

入学金を除いた授業料半年23万9千4百円、年47万8千8百円、月に3万9千9百円が必要。部屋代1万3千円（市内でこれだけ安い部屋は現在では皆無に近く、平均は3～4万円）。食費3万円（1日千円）。合計8万9千円だが、ほかに教科書代、光熱費等がかかり、最低でも12万円は必要となっている。仕送りが期待出来ず、授業料減免や奨学金が無ければ、これだけの金額を毎月稼がねば授業料未納による除籍が待っており、学業を継続する権利さえも保てない。しかし、留学生には一方で厳しい就労の制限（正規生で週28時間、研究生で週14時間以内）があり、この禁を犯さざるを得ないものは実態を声に出して訴えることができないのが現状である。不法就労による留学資格

剥奪を何よりも恐れているのである。授業料減免もなく奨学金もない留学生は今のところそう多くはないが今後増えることが予想され、問題は大きくなる。

さて、仮に毎月13万円を稼ぐとして試算してみると労働量は次のようになる。

鹿大日本人学生のバイト料はよくて1時間700円であるが、一日8時間20日働いたとして税込み11万2千円となるが、多くの留学生は日本語が不十分だということで仕事もなかなか見つからず、見つかったとしても安く使われ仕事もきつい。また、8時間の労働ということは夕方5時から夜中の1時まで働くということである。実際のバイト料はもっと安いので当然労働時間は上記試算より多くなる。これでは翌日の授業に出る体力と睡眠時間とは確保できない。

卒業を目指して胸を膨らませて鹿大に入学した留学生が、どんなに向学心に燃えていようが、歯を食いしばって頑張ろうが、経済的現実を前にしては修学を全うすることの極めて厳しい現実のあることを知っておく必要がある。このような厳しい状態に置かれている留学生が毎年、百名近くいるという事実から目をそむけてはなるまい。しかもこの私費留学生の数は今後も増えることが予想され、付随してアルバイト先の奪い合い、バイト料のダンピング、日本人学生との競合という事態も起こり得る。日本人学生には家庭教師などの割の良いアルバイトもあるが、非英語圏が多数を占める私費留学生には語学教師の口などなく、いきおい低賃金の長時間苛酷労働が強いられる。

留学生課では、このような実情をふまえて可能な限りの方策を採ってきた。留学一年目は家賃も安く、比較的便利な留学生会館への優先入居をはかったりもしたが、もはや部屋数不足により破綻をきたしている。また、授業料免除か奨学金のどちらかはとれるように配慮したりもしたが、国の財政逼迫による修学補助金の削減や、困窮する日本人学生への奨学金の分配増の要請など、留学生を取り巻く情勢は厳しさを増している。すでに留学生課や留学生センターで解決可能なスケールを超えた事態が起こっている。

このような経済的理由による修学困難な状態が多くの私費留学生に存在していることを十分に認識した上で、それではいかなる手段を講じ得るのかを検討せねばなるまい。

「アルバイト→授業に出られない→成績不良→奨学金・授業料減免なし→アルバイト」の悪循環を断ち切る方策が真剣に考えられねばならない。私費留学生のみを対象とした宿舍借り上げや手配、授業料負担減免のための学内奨学金の新設や増設もその方策の一つであろう。ほんの数万円の補助で救われる留学生は多いのである。

国費留学生には海外旅行や郷里送金をするものもいるような、ゆとりある生活が可能なことに比して、格差はあまりに大きい。国費留学生を対象とし中心とした今までの留学生施策は全国各地で見直しを迫られているのが現状である。

また他方、留学生を増やそうとするあまり、日本語力の不十分な留学生をとる傾向もみられるが、これも授業についてゆけない留学生への十分な配慮なしに行われれば、留年者退学者の後始末に追われ、本来の手をかけるべき留学生の修学援助を手薄にする結果を招く。

重要なことは、いかに優れた留学生を多く集めるかということである。そのための魅力的な鹿児島大学を作るための工夫を、経済面を含めて整備してゆくことが必要である。

私費留学生の抱えている困難な状態は全国的に共通の悩みではあるが、他の地域に先駆けて鹿大が留学生に手厚い保護を与え得たならば、その評判は千里を走り、必ずや優れた留学生の競って集う所となる。修学環境が良ければ、優れた人材は自ずと集まってくるものである。優れた人材は優れた成果を残し、その恩恵は将来必ず鹿大に戻ってくるのである。

鹿大へのハードルを低くするのではなく、競って来るものを選抜することができるような、魅力的な鹿大づくりの基盤整備をすることが緊急の課題である。幸いにも鹿児島には留学生への好感・歓迎の気風が残っている。地域との連携をはかり、強力な協力関係を築いてゆくことができる条件がある。

これらの基盤整備が、鹿大の教育・研究内容を魅力的なものにする受け入れ側の真摯な努力と結びつけば、さらなる発展が期待できる。

また、優れた留学生を選抜するための判定のノウハウの蓄積も急務である。特に私費留学生の増加に備えた、国別の実態に即した判定基準を確立せねばなるまい。

いずれにせよ、選抜を担当する各部局と留学生センターとの情報の交換と連携とが密になることが望まれる。

(三) 派遣留学生について

鹿児島大学は外国の協定大学31校（2001年3月）を数えるが、日本人留学生数は奨学金を得て協定大学に派遣されているものが毎年5名前後、私費で協定大学に行っているもの数名、ほかに個人での私費留学生（短期語学研修は除く）をすべて含めても十名強である。この数は受け入れ留学生数274名と比較するにきわめて少なく、国際化を標榜するにはあまりに貧しい数であり、派遣および留学の拡大を真剣にはからねばならない。

派遣拡大には単位互換制度の積極的導入など学内で整備すべき課題が多い。経済的理由や就職難、また将来への不安から留学をためらわせる要因が社会全体にある以上、少なくとも学内からは留学をためらわせる要因を排除すべきである。一年留学をすれば一年卒業が遅れるといった現状を変えねばなるまい。そのための努力が望まれる。

留学生課と留学生センターは日本人学生の留学を推進させるため、昨年11月に留学説明会を全学向けに行った。比較的実績のある協定大学18大学を選び、その説明を多くの先生方をお願いした。事前広報一週間という慌ただしさにもかかわらず、88名の学生の参加があり、関心の高さがうかがえた。その後12月に協定大学派遣留学希望者を公募し、筆記試験（英語圏希望者のみ）と面接による選考を実施し、応募者12名うち合格者4名（英語圏3名、中国1名）の結果を得た。今回の選考は英語圏協定大学への希望者の絞り込みを目的としたが、併せて今後の派遣選考のあり方を視野においた。

選考を通じての問題点は、①応募者が少なく、適格者はさらに少なかった（英語力不足） ②留学の心構え、派遣希望国情報等、事前調査不足が感じられた ③英語圏以外への語学準備は、ほとんどなされていなかった ことなどが挙げられる。

英語圏協定大学の中には TOEFL 550点以上を正規科目受講の条件にしているところのあることや、英語圏以外では語学をまず学習せねばならないことなど、現状では単位互換制度の適用には難問がある。派遣先での語学学習を鹿児島大学が取得単位として認定する制度の追求などが考えられねばなるまい。大学院留学の場合には語学をあまり必要としない実験や実習などの科目の単位を認定することが既に行われている研究科もあるが、まだ全体化してはいない。

これら困難な情勢の中で、今後派遣や留学を増やすにはどうすべきであろうか。学生への周知をはかり、国別の派遣のノウハウを蓄積し、留学の効用を説かねばなるまい。困難を覚悟して留学する学生たちを各方面から支援したいものである。

さらに、もう一つ解決すべき問題がある。それは文部省短期留学推進制度（派遣）との整合性である。

今までは奨学金が認定されたときに誰をどのように派遣するのルールがまだ定まっていなかった。今後は「選考合格者について申請」する方式などが考えられるが、その実現には周知と合意が必要である。また派遣にあたっては以前から窓口となってきた派遣担当者（教官）の学部をこえた協力の確保や、派遣担当者による具体的問題点の共有および相互理解を深めてゆく必要がある。それには各国各大学の実状に対する個人の理解度の差を埋めてゆくことが前提となる。それは自らの経験や知識の限界を超えた現実の存在の認識や、各国事情の理解を促すこととなろう。

今年四月に派遣奨学金が認定された大学名の通知が届いたが、そのうちのいくつかの大学は通知を受け取ってから派遣者の選考を始めざるを得なかった。今回は幸いにも三校とも中国であり、そのうち二人は派遣留学生選考を受けて不合格であったため、私費留学を覚悟して留学生センターで中国語と派遣前研修を昨年12月以降継続して私的に受けていた。他の一人もしばしば留学生センターを訪れ、留学情報を収集に来ていた。これらは派遣者決定を比較的円滑に行えた遠因であったと考えられる。派遣留学説明会は徐々に効果を挙げてきていたのである。

今後は留学生選考と文部省短期留学推進制度との整合性と一本化をすすめ、留学生の拡大に向けて、さらに取り組んでいかねばなるまい。

ところで派遣にあたっては、語学を含めた派遣前研修が必須である。派遣国の歴史と背景の理解、および語学学習は相手国への最低限の礼儀でもあろう。とりわけ協定大学へは鹿児島大学の代表として派遣されるのである。派遣前研修をシステムとして整備したいものである。

（四）留学生長崎研修旅行

留学生対象に文部省の補助により研修旅行が行なわれているが、今回長崎への研修旅行に同行の機会を得た。ふだん教室等では見られない留学生の素顔に触れ得たので、その様子といささかの所感を記したい。参加者は留学生四十名、職員三名、留学生センター教官二名、日本人学生チューター三名であった。

原爆資料館 三十年ぶりの長崎の再訪であったが、施設も展示も格段に整備され充実していた。

原爆体験ビデオなどの提示の仕方も工夫され多様であり、思わず引き込まれてしまった。留学生も同じように自然に引き込まれていたようである。見学時間が一時間と少なかったことに不満を言っていた。見学後は、先ほどまでのうきうきとした旅行気分が一変したのが感じ取れた。その後、大浦天主堂やグラバー園へいっても、遙かに爆心地を眺めて三キロ四方を焼き尽くす原爆の威力を実感しようとしており、放射線の到達する範囲やその残存量についても、しきりとガイドさんに質問をしていた。核兵器全廃を願う長崎市民や日本人の心情を理解しようとしている様子がみえた。夜になっても日本人チューターなどにしきりと質問をしていたが、きちんと答えることのできていない日本の若者にはちょっとがっかりさせられる。

核兵器全廃を希求する日本人の心情とは別に、現実の日本がアメリカの核の傘の下にいる事実を留学生たちは知っている。他国の経済支配にさらされている自国の困難な現実を、表面繁栄を示す日本の中に同じように見いだしても不思議ではあるまい。

出島資料館　出島に住んでいたオランダ人の生活を描いた絵の前で足がすくんだ。オランダ人一行が食事をしている場面のサービスをしているのは、明らかにバタビア（インドネシア）人であった。そのとき私のそばにはインドネシア人留学生が三人（そのうち私の学生は2人）いた。オランダ人の奴隷として連れてこられた自分たちの祖先を、彼らはその民族衣装からはっきりと認識したはずである。どう話しかけたらよいか迷っているうちに、彼らはにっこりと笑って何も言わずにその場を立ち去った。日本語の教室では、そのうちの一人のインドネシア人とオランダ人とが毎日机を並べて学んでいた。五ヶ月あまり、この二人とともに中米ホンジュラス人、南米コロンビア人、中国新疆ウイグル自治区のウイグル人、スペイン人と一緒に漢字を学んできたが、授業中もおのずと民族性に話題が移ることが多かった。独立を求めるウイグル人がなぜ漢字（中国語）を学ばないかということ、中南米の反米感情に似ていることなどに彼らはすぐに気づき、打解けてゆく。そのときオランダ人学生が複雑な表情をしていたが、その表情の意味が長崎ではじめて解けたように思えた。彼は隣に座っているインドネシア人留学生のことを考えていたのであろう。インドネシアを植民地としていたことへの謝罪をオランダ政府は今にいたるもしていない。

目を転じると留学生の人だかりがあった。覗いてみるとそこには19世紀中頃の宗主国別に色分けされた植民地世界地図がテーブルに嵌め込まれていた。留学生の関心は自国の位置とその説明に費やされていたが、多くは被植民地についてのことであった。ひとしきりアジア系（被植民地系）の談義が続き、理系大学院留学生達の歴史認識不足が非難されていた。しばらくするとアジア系は去り、中南米とアフリカが議論を始め、それをヨーロッパ系が傍で聞いていた。宗主国スペイン留学生が、かつての栄光を現在と引き比べて嘆いているのを、みな笑いながら聞いていた。今ではアメリカが世界全体を植民地化しているとの指摘に、皆は静まりかえった。最後まで残っていたのはスペイン人留学生とコロンビア人留学生であった。ガルシア・マルケスがコロンビア人であること、ボルヘスやチェ・ゲバラの話しなどで水を向けると、中南米の国境の不合理なこと、中南米人共通の国境意識の低さ・中南米人の同胞意識や反米感情などを力説していた。

出島資料館では研究室や教室ではめったに見せない彼らの本音の一端に触れ得た思いがした。それぞれの国の歴史と現状を背負い、胸のうちに秘めているものの熱さを痛感させられた。

まとめ 留学生たちは研究室を離れると宿舎の留学生会館などで相互に日常生活上の接触はあるものの、それぞれの国の歴史や背景を互いに知り合う機会は少ないように見受けられる。それがこのような研修旅行をきっかけに自らの国の歴史と民族を思いだし、他国留学生との違いに今更ながら気づき驚く。ここでは実に新鮮な互いの発見が行われており、自らのアイデンティティーの検証が行われている。留学の意義と重要性が、学位や資格の取得のみではないことをひしひしと感じさせられる。明らかに新しい文化の創造と調和への模索が行われているのである。その場を鹿児島大学が提供していることは意義深い。惜しむらくは、この生々しい現場に留学生指導担当教官や日本人学生が立ちあえていないことである。この異文化のぶつかり合いの臨場感を、なんとか日本人が共有できないものであろうか。

さらにもう一つ気がかりなことがある。それはこの研修旅行に私費留学生の参加が少ないことである。アルバイト等で忙しい彼らが日程のやりくりの可能なように、早めの周知が必須なのであろう。

ほかにハウステンボスコースがあり、また本年度は特に北海道研修旅行も追加実施されたが、いずれも意義深いものであったと聞いている。

KUFSA（鹿児島大学留学生会）の活動について 日本語研修コースは日本語ゼロ初級留学生を対象に約半年間行われているが、異なった民族と複雑な歴史背景とをもった留学生が同じ教室で同じ机を並べて学ぶことの重要性には計り知れない意義がある。もちろん彼らは日本語を学ぶわけだが、学ぶものは日本語にとどまらない。日本語を通じて日本語以外のものを学び合い、真の友情を培っている。生涯を通じての国境を越えたつながりも生まれる。それは留学生の家族の受講も認められている一般コースも同様である。この輪の中に入ってゆく日本人が少ないことは誠に残念であり、もったいない限りである。

KUFSA は留学生同士が互いの国を理解していないことに気づき、相互理解を深めるために月に一度各国代表者が自国の歴史と現状について解説する集会を催している。この集会は研究室や教室では日頃見せない留学生の素顔と本音が聞ける良い機会ではなかろうか。また日本人にとっては様々な思いこみを修正するチャンスともなろう。今までは残念ながらこの集会に参加する日本人は少なかったそうである。日頃生活を共にしている留学生同士ですら互いの国への理解不足に気づき、きちんと理解を深める努力をしているのである。まして日本人はさらなる努力をしなければ本当の姿を知ることはできまい。このような集会に日本人教職員・学生の参加を呼びかけたい。とりわけ留学生指導担当教官には是非とも参加して下さるよう、ご招待するよう KUFSA をお願いしている。積極的参加をお願いしたい。

また、今年度からKUFSAと日本人学生との合宿交流会も五月に計画されている。交流の輪の広

がりを期待したい。

(註1)

山田光義「留学生受け入れ計画についての所感」(『留学生交流・指導研究』Vol. 3、2000.12.28)
